

「わたしにつながっていないさい」 (ヨハネによる福音書15:1-8)

ワインの誕生は5000年前程のメソポタミア一帯と言われ、パレスチナ地域も発祥の地の一部とされています。年間通して温暖な気候であり、ぶどうがよく育つ地域です。ぶどうは旧約聖書にも頻繁に登場し、「ぶどうの木」は、イスラエルの民を表すことがあります(エゼキエル書、詩編等)。しかし、このぶどうの木は良い実をつけるどころか、悪い実をならせてしまう(イザヤ書、エレミヤ書等)のです。そのイスラエルに代わり、「まことのぶどうの木」としてこの世に遣わされたのが主イエスである、と今日の福音は宣言しています。このまことのぶどうの木とつながるなら、それは神とつながり、良い実をつける者となる、と主イエスは言われています。先週の福音の「わたしは道であり、真理であり、命である」の言い換えとも言えます。道であり、ぶどうの木である主イエスにつながることで、わたしたちは真理であり、命である神と結ばれ、実ることができるのです。今日のぶどうの木の話しは、ぶどうが身近なパレスチナの人々にとって、とても分かりやすいお話だったことでしょう。ぶどうが身近、といえば東京聖テモテ教会です。

教会のぶどうの木は、冬の間は枯れてしまったように見えます。細く、頼りない一本の幹、そこからヒョロヒョロと伸びる枝々。まさかそこから葉が茂り、収穫しきれないほどの実りをもたらすとは信じがたいことです。今年の3月初旬、ある方がぶどうの木の枝をバッサリと伐採してくださいました。これでいよいよぶどうの木も終わりか、とすら感じられるほどの剪定ぶりでした。驚いたのは、切られた部分から、水が「ポタポタ」ではなく「ボタボタ」というほどに滴り落ちてきたことです。しかもそれは一週間以上も滴り続けたのです。冬の間、枯れたようにみえたその細い幹は、地面から大量の水分・養分を吸い上げ、枝に送り続けていたのです。それから二ヶ月後の今、ぶどうの木は枯れるどころか、葉が青々と茂っています。夏になれば今年も、収穫できないほどの実を結ぶことでしょう。驚くべき命の力です。今日の福音で主イエスは、「わたしはぶどうの木。あなたがたはその枝である。わたしにつながっていれば、豊かに実る」と仰っています。主イエスは、たとえ傍からは枯れ木のようにみえる時でも、わたしたちに潤沢な養分を送り続けてくださり、青々と葉が茂り、実がなる、そういう命を与えてくださるのです。stay homeの今、この時もです。

今日の福音では、「つながっている」(ギリシャ語「メノー」)という単語が、7回も使われています。「つながる」、「留まる」などと訳され、「内にある」「(内に)留まる」という意味の言葉です。ここでは、ぶどうの木と枝のはなしなので、「つながる」と訳されているのですが、少々主イエスがおっしゃっているイメージと翻訳が合わないように感じます。教会のぶどうの木を眺めていると(実は東京諸聖徒教会のキウイもそうです)、もとの幹から自然と枝分かれをしていて、どこからがもとの幹で、どこからが枝なのか、はっきり分かりません。たしかに枝は幹から出のですが、それらが一体となって「木」なのです。そういう一体の幹と枝の全体をさして、主イエスは「わたしはぶどうの木である、あなたがたはその枝である」と言われているのです。たしかに、幹は主イエスで、枝は弟子たちですが、それらは分かちがたく一体で、主イエスが弟子たちの中において、弟子たちも主イエスの中にいる、ということを主イエスは言われています。互いに切り分けられるものではなく、弟子たちにもイエスさまがおられるし、主イエスにも弟子たちがいる、そういう相互に交わり合い、関わり合い、存在し合う、それが主がわたしたちのうちに留まり、わたしたちが主イエスに留まる、ということなのです。このことを想像するだけで、主イエスに結ばれた命のなんと豊かなことか、心強いことか、と感じます。

では、主イエスにつながる、主イエスに留まるとはどういうことでしょうか。今日の福音はそのことについても、深くわたしたちに伝えてあります。それは、「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にもあるならば」と7節にある通り、主イエスに留まるとは、主イエスの言葉、み言葉に留まる、ということです。「主イエスが弟子たちの内にいる」とは、「主イエスの言葉が弟子たちの内にある」、ということなのです。「はじめに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」と始まるように、ヨハネ福音書において、主イエスは神の言であり、主イエスの言葉は子なる神としての主イエスそのものです。ですから、主イエスの言葉、み言葉に留まるなら、わたしたちは主イエスに留まることになり、主イエスと神との交わりに迎えられるのです。繰り返しになりますが、やはり主イエスは道なのです。その道は、「み言葉」であり、み言葉に留まることが、神への道を歩むことになるからです。それは、み言葉を眺めて、理解しようとするのではなく、

してありません。ぶどうの木の枝と幹のように、み言葉がわたしたちの内にあり、わたしたち自身の存在もまたみ言葉の内に溶け出していき、み言葉と生身の交わりをする、ということなのです。先週の福音で、ご自分が天に昇るのは、わたしたちのために「住むところ」を用意しに行くためだ、と主イエスは言われました。この「住むところ」というのは、今日の福音で7回も使われている単語「メノー」から派生した単語です。「メノー」という単語には、「人が自分本来のあり方を見出したところを離れず、そのまま留まる」という意味があるとされています。つまり、「住むところ」とは、わたしたちが本来のあり方を失うことのないところ、ということです。その場所こそ、主イエスと相互に分かちがたく共にいる場所、天の国です。イエス様は、そこにわたしたちを迎え入れるために、天に昇られるのです。しかしその場所は、死んでから迎えられるところではないことが、今日の箇所から分かります。わたしたちが今、主イエスに留まるなら、わたしたちはこのときにも、「住むところ」に迎えられるのです。

しかし、主イエスは「わたしにつながっていないながら、実を結ばない枝は皆、父に取り除かれる。」という大変恐ろしいことも言われます。木につながっていても、実を結ばない枝があるということです。まさにそれがユダでした。ユダは表面的には主イエスに従い、行動を共にしてきました。しかしその過程で、お金をくすねたり、高価な香油を主イエスのために用いた女性を咎めたりしました。心は主イエスから離れていたのです。木は栄養を送り続けています。けれども、枝のほうはそれを受け取っていませんでした。主イエスは、わたしは「まことの」ぶどうの木と言われました。ということとは、「まことではない」ぶどうの木がある、ということです。ユダがつながったのは、「まことではない」木だったのです。それはとてもつらいことです。命をくれると頼った木が、根は弱く、腐っていて、頼りなく枯れ果ててしまう木であったのです。まことのぶどうの木から離れてしまったユダは、生きるためのすべての養分が尽き果て、枯れ果てた枝となってしまいました。それに気がついた時、ユダはもう後戻りできず、自らの命を投げるしかありませんでした。今日の場面は、そのユダが去った後の弟子たちへの言葉です。残った弟子たちが、主イエスのことをよく理解していたかというところ、そうではありません。しかしそれでも、彼らは主イエスのもとに留まりました。その留まる弟子たちに向かって、主イエスは「わたしにつながっていないさい。わたしはあなたがたに留まるから、あなたがたの中にわたしを受け入れなさい。そうすれば豊かな実を結ぶのだ」と命令されました。この力強い言葉は、今このときに、このみ言葉を聞いているわたしたちにも向けられています。わたしたちが必死で何かをし、成し遂げたから実りがもたらされるのではなく、わたしたちはただ主イエスの中に留まる、主イエスとの交わりに生きる、それだけが求められていることです。その交わりに留まるなら、あとのことは、わたしたちのうちに生きてくださる主イエスが、農夫である神が手入れをしてくださり、実りをもたらししてくださいませ。

この礼拝休止期間が始まってすぐの頃、わたしは何をしても足りない気がして、焦りました。何が牧師のやるべきことか、教会は何をするべきか、と葛藤しました。今は落ち着いて、静かにしつつ、やれることにチャレンジしてみようという感じですが、今でも、なすべきことは何か、求められていることは何かと問い続けています。そのようななかで、今日の福音で、「わたしにつながっていないさい」との主イエスの言葉が、わたしの、わたしたちの今すべきことを明確に示してくださったように感じています。それは、主イエスに、み言葉につながることに、留まることです。主イエスというぶどうの木につながるなら、あとは農夫である父なる神が、心をくだいて枝を手入れしてくださいませ。パレスチナの気候では、ぶどうの実は、丁寧に手を入れると、年間7度も実ることがあるそうです。しかし、手を入れなければ、実る回数も少なくなり、味も悪くなります。そもそもぶどうを植え、良き実りをもたらしするためには、土を耕し、雑草を取り、剪定し…と大変な手間がかかります。この一切の手間を、父なる神がわたしたちに施してくださいませ。この農夫の働きに身を委ねるなら、自らの力ではつけることなどできない豊かな実をつけることになるのです。教会のことも、神の家族のことも、自分自身のことも、あとのことは農夫である神が手入れしてくださいませ。信じて、み言葉なる主イエスに留まることが今すべきことです。毎日、主イエスの御名によって祈り、聖書を読み、み言葉を胸に一日を過ごし、感謝して眠りにつく。そういう、まことの木なる主イエスと共なる日々において、わたしたちの行いは自然と変えられ、導かれ、今生きるべき生き方をする事ができることと信じます。その場所へ、その命へ、主イエスはわたしたちを招いておられます。